

日本沈没

2006(平成18)年5月29日鑑賞<試写会・NHK 大阪ホール>



第1章

話題作が
いっぱい!!

監督=樋口真嗣/出演=草薙剛/柴咲コウ/豊川悦司/大地真央/石坂浩二/國村隼/福田麻由子/吉田日出子(東宝配給/2006年日本映画/135分)

……1973年のメガヒット作『日本沈没』から33年。日本沈没の新しい科学的根拠と美しいVFX技術を携え、また愛と感動の物語を軸に据えた作品として、今見事に甦った。しかし、阪神・淡路大震災においてその不十分さが指摘された「危機管理体制」が、未曾有の国難にもかかわらず、この映画では明確に意識されていないのは大いに不満。それやこれや、この映画から学ぶべきさまざまな視点を、坂和流評論の中でタップリと……。

1973年のメガヒット!

小松左京原作の『日本沈没』が発刊されたのが、1973(昭和48)年3月。そして、映画公開はその年の12月29日という異例の早さ。製作費5億円の超大作は、観客動員数650万人、興行収入40億円のメガヒットを記録した。この頃の私は、1974年4月に弁護士登録をする直前の司法修習生時代。公害問題への参加と忙しい修習生活の中、小説を読んだり、映画を観る時間的余裕は全然なかったため、弁護士登録後、その小説をむさぼるように読み、映画はビデオで何回か観た記憶がある。

あれから33年……

あれから33年。日本国は今や大きく変わっている。昨年2005年は「戦後60年」という節目の年となったため、そういう視点からさまざまな取り組みがなされた。しかし、今年2006年は、5年余の小泉政権が9月に終わりを迎える中、「ポスト小泉」の話題に注目が集まり、憲法改正・教育基本法改正をはじめとする「この

国のかたち」のあり方という骨太の視点が薄れている感がある。「戦後60年」の検討に大いに貢献したのが『ローレイ』(05年)だったが、その樋口真嗣監督が今年『日本沈没』を撮ったのは、日本国の危機管理のあり方を今一度真剣に考える上で非常にタイムリーなもの。『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)を代表とする昭和30年代を懐かしむ映画は、観ていると懐かしく楽しいものだが、そうそう昔話を楽しんでばかりはいられない。この映画が描く、地球科学的意味での「日本沈没」はまだまだ遠い未来のことだとしても、軍事的意味での「日本沈没」や、政治・経済的意味での「日本沈没」は、数十年後という射程距離に迫っているのではないだろうか……？

そういう意味で、この映画の坂和流評論については、ストーリー紹介は極力省き、私を感じたいいくつかの視点を提示してみたい。

旧「沈没」VS 新「沈没」の地球科学的根拠は……？

1973年の小松左京原作の小説『日本沈没』が大ヒットした原因は、誰もがそんなことはありえないと思っている日本沈没という「現象」が、本当にあり得るといふ科学的前提の下でそのストーリーを構築したこと。パンフレットにある山岡耕春氏(東京大学地震研究所教授)の「地球科学の進歩と『日本沈没』」によれば、1973年という年は、「地球科学の大革命とも言えるプレートテクトニクス理論が完成されてからまだあまり時間がたっていない時期であった」とのことだが、他方、「小説『日本沈没』はそのプレートテクトニクス理論を取り入れ、日本列島周辺における地下の動きを100万倍にするという『いたずら』をして、日本国民を未曾有の危機と試練に陥れた」とのこと。なるほど、なるほど……。

これに対して新作では、「地殻の最下部がはがれて、マントルに落下する構造」という「デラミネーション」が最大のポイントだが、他方、「バクテリアの急速な増殖によって、地殻やマントルの岩石の結晶境界に流体が染みわたり、流動化を起こす」という1つの仮説をあえて誇張することによって物語を構築している。

第2、第3の山岡教授を……

地球科学の30余年間の進歩を受けて、このように地球科学的根拠をもっともら

しく見せた技術論は立派なものだが、これについての私の評論はこの程度で……。なぜなら、これについて私は全くの門外漢だから……。しかし、この山岡教授の解説を読めば勉強できるネタはいっぱいあるから、この映画を観た多くの子供たちの中から、地球科学に強い関心と興味を持つ子供たちが増え、第2、第3の山岡教授の誕生を期待したいものだ。

涙と感動にウエイトを置きすぎでは……？

この映画の主人公は、本来は「沈んでいく日本国」だが、映画製作の目的はドキュメントでもなければ、科学映画製作でもないため、観客に感動を与えるための主人公が当然、必要。それが新作では、小野寺俊夫（草薙剛）と阿部玲子（柴咲コウ）の2人。小野寺は潜水艇のパイロットで、玲子はハイパーレスキュー隊員。日本沈没の危機が迫りくる中、この2人は「愛情 VS 任務」「私 VS 公」の葛藤に悩みつつ、最後にはそれぞれ感動的な生き方を選択してくことになる。そして、それが多くの観客の涙と感動を誘うわけだ。

映画には必ずそういう「仕掛け」が必要だが、『日本沈没』という映画の中で、何を最重点に置くかは監督の最終決断。樋口真嗣監督が、SMAPの草薙剛と今や若手女優 No.1の柴咲コウを起用し、日本沈没が迫る中での2人の愛を描き、最後には小野寺の尊い自己犠牲の姿にウエイトを置いたのは、わからないではないが、私の意見では少しそれに偏りすぎ……。

この映画においては、男女の恋愛模様や愛の姿は極力小さな扱いとし、さまざまな個人やさまざまな組織が、総力をあげて日本国を守るという構図に重点を置いてほしかったと思うのが私の気持だが……？

阪神・淡路大震災と私の弁護士活動

1995年1月17日午前5時46分、震度7、マグニチュード7.2の大地震が阪神淡路地域を襲った。阪神・淡路大震災だ。

私は都市法を研究・実践している弁護士として、2月10日付朝日新聞論壇に「被災地復興は多様なメニューで」を投稿した。さらに私たちのグループは2月1日「弁護士有志緊急アピール」を発表し、8月には『震災復興まちづくりへの

模索』(都市文化社)を出版した。これらは、いずれも震災復興まちづくりのあり方の方向性を提示したものだ。

そしてまた同年8月以降、私は芦屋中央地区まちづくり協議会の顧問弁護士として、以降6年間にわたり、具体的な震災復興まちづくりのために悪戦苦闘を重ねてきた。

災害対策基本法をどう見るか……？

そんな中、震災復興まちづくり以外にも、個人補償の是非論などさまざまな論点が現実を選択していかなければならないテーマとして提示されたが、その1つが危機管理体制のあり方。そしてその焦点は、1959年の伊勢湾台風を契機として立法された当時の危機管理の基本法である「災害対策基本法」で、阪神・淡路大震災のような大規模災害の非常時に対応できるのかどうかということ。この議論の中心人物は神戸大学の阿部泰隆教授で、震災後いち早く出版された『大震災の法と政策—阪神・淡路大震災に学ぶ政策法学』(1995年・日本評論社)で詳しくその論点と方向性が指摘されている。

ところで、今回の『日本沈没』は、阪神・淡路大震災という大規模災害の数千倍、数万倍の大災害であることは明らか。そんな「日本沈没」という未曾有の大危機について、いかなる危機管理体制で臨むのか？ その点についての、この映画の検討と描き方は……？

危機管理体制についての研究不足 その1

この映画は危機管理体制についての研究不足が如実。その第1は、アメリカの科学者から日本沈没の可能性を告知された内閣総理大臣、山本尚之(石坂浩二)が、危機管理担当大臣として文部科学大臣の鷹森沙織(大地真央)を任命するというストーリー。山本総理は、「こんな事態となった今、一番大切なものは心だ」という「口説き文句」で沙織を就任させるわけだが、どうもこれは情緒的にすぎるのでは……？ そのうえ、危機管理担当大臣を創設するのはいいが、文部科学大臣との「兼任」というのは、いくら何でも危機管理担当大臣の仕事を軽視しすぎ……。

危機管理体制についての研究不足 その2

私は阪神・淡路大震災の後、1998年10月11日、東京の成城大学で開催された日本公法学会の第63回総会の「第二部会」において、「災害と都市計画法制の見直し—震災復興まちづくりを契機として—」と題する報告をしたことがある。その際、私がこの話の大前提としたのが「災害と都市計画法制の現状」。

それによると、当時、災害対策基本法には、国土庁長官を本部長とする非常災害対策本部（災害対策基本法24条）と、内閣総理大臣を本部長とする緊急災害対策本部（災害対策基本法107条）が規定されていた（現在は、国土庁は国土交通省に統合され、防災行政は内閣府に移管されている）。

日本沈没という国家未曾有の危機に立ち向かうためには、直ちに緊急災害対策本部を設置して、内閣総理大臣が陣頭指揮をとるのが当然。ところが、危機管理担当大臣を任命してそれでコト足れりとしているのは、明らかに内閣総理大臣の職務怠慢と言われてもやむをえないはず……。その点が、研究不足の第2。

危機管理体制についての研究不足 その3

第3に、中国への避難民受け入れ交渉のため、山本総理を乗せた政府専用機が阿蘇山上空を飛行中、阿蘇山の噴火によって山本総理死亡という大変な事態になった後の危機管理体制が問題。内閣法は「内閣総理大臣に事故のあるとき、又は内閣総理大臣が欠けたときは、その予め指定する国務大臣が、臨時に、内閣総理大臣の職務を行う」（9条）と定めており、これによって指定された国務大臣が「内閣総理大臣臨時代理」の職名で職務を行うこととされている。

日本では、2000年4月1日深夜、当時の小渕恵三総理が脳梗塞で倒れ、青木幹雄内閣官房長官が同月3日付けで臨時代理に就任した（翌4日内閣総辞職）が、この際、小渕総理に臨時代理を指定することが時間的・医学的に可能であったかどうかが大問題となった。そのため、2000年4月以降は、組閣時などに内閣総理大臣臨時代理の予定者を第5順位まで指定し官報掲載するように方針が改められた。そして原則として、内閣官房長官たる国務大臣が第1順位とされ、第2順位以降の人選は個々の経験等を勘案して総理が決定することとなった。

ちなみに、現在の第3次小泉改造内閣における内閣総理大臣臨時代理は、第1順位：安倍晋三（内閣官房長官）、第2順位：谷垣禎一（財務大臣）、第3順位：麻生太郎（外務大臣）、第4順位：与謝野馨（内閣府特命担当大臣（金融担当、経済財政政策担当））、第5順位：中川昭一（農林水産大臣）の順で指定されている。この映画は、このような重大な国の枠組みに関する法制度を一体どのように理解しているのか、大いに疑問がある。

危機管理体制についての研究不足 その4

第4に、官房長官の野崎亨介（國村隼）がかなりのワルだったというのは、ちょっとヒネリすぎ。危機管理担当大臣の沙織を準主役的なヒロインにするためのテクニックかもしれないが、官房長官が京都の仏像などの国宝をアメリカへの逃走の手みやげとして持っていくというのは、あまりにも国民を愚弄した行為。蒋介石率いる国民党軍が中国共産党との内戦に敗れ、中国本土にあった国宝をごっそりと持って台湾に逃げて行ったのは、有名なお話。そのため、北京の故宮と台北の故宮の2つが今でも張り合っている（？）わけだが、現職の官房長官がアメリカ逃走の手みやげに国宝を持ち出すとはあまりにもマンガ的……？

日本にも一流の地球科学博士が……

国際比較上、日本の「知力」は衰退の一途をたどっているように見えるが、それでもなお、日本には一流の科学者は多いはず……。この映画では、地球科学博士の田所雄介（豊川悦司）がそれ。田所が独自に調査した結果、アメリカ側の発表は楽観的にすぎ、日本沈没の日までは338.54日と計算された。沙織が立ち上げた研究機関が「D1」、そして緊急退避計画が「D2」だが、結局田所がその中心メンバーとして活動することに……。

そして、深海調査のため「わだつみ6500」という潜水艇に乗り込むのが、小野寺と結城達也（及川光博）。そんな田所には唯一、日本沈没を最小限に防止する秘策があった。それは「日本列島を海溝に引きずり込もうとしているプレートに掘削船で無数の穴を掘り、核弾頭に匹敵する威力を持つ“N2爆薬”を仕掛け、それを連鎖爆発させることによって日本列島をプレートから切断する」という壮

大な構想。その科学的な根拠は私にはサッパリわからないが、以降、ストーリーはこの計画を軸に展開していくことに……。

このように日本にも存在していた一流の地球科学博士が日本沈没を救う「期待の星」になるわけだが、ここでも私が気に入らないのが、この「D1」「D2」チームの組織体制。野崎官房長官がアメリカへ逃走(?)した今、事実上その指揮をとっているのは沙織だが、内閣や内閣総理大臣は一体どこに行ったの……?

特撮や VFX 技術の美しさはさすが……

旧作と新作が決定的に違うのは、特撮や VFX の技術。スクリーン上には、再三再四、日本列島が少しずつ分断され、沈没していく姿が映し出されていく。各地の山々に起こる噴火や津波の様子がリアルにスクリーン上に映し出されると、観客は恐怖心よりも美しさの方が先に……?

舞台あいさつで、樋口真嗣監督は、「大阪・福岡・名古屋・北海道のまちを沈めてしまっておめんなさい」と謝っていたが、これほど次々と沈めていくことができるのは、VFX 技術のたまもの……?

また、東京の超高層ビル群が崩壊していく様子も圧巻だが、これらは阪神・淡路大震災を体験した人々や、9・11テロで世界貿易センタービルの倒壊を見聞した人々は、あまり見たくない風景かも……。『ローレライ』での決戦シーンも、VFX であることを前提としてかなり興味深いものだったが、本作では、その美しさにビックリ……。

すばらしい主題歌だが、歌うのはちょっと……?

今日のスクリーンによる舞台あいさつは、東京会場でやっている舞台あいさつをリアルタイムで、各地の試写会場に同時に結んでいるもの。草薙剛や柴咲コウら俳優陣の「しゃべり」は意外にヘタクソだなと思っただけで、面白くも何ともないものだったが、感激したのは主題歌の熱唱。久保田利伸と韓国の新人女性歌手 SunMin がデュエットで歌う『Keep Holding U』は、久保田利伸が作詞・作曲した壮大な曲で、この映画にホントにピッタリの名曲。しかし難点は、あまりにも難しすぎる曲だということ。歌唱力抜群の2人だからこそ歌いあげることがで

きるが、これをカラオケで歌えるアベックはまず登場しないのでは……？

日本からの避難民を受け入れてもらうためには……

日本は四方を海に囲まれた島国で、あらゆるところに港があるから、「日本脱出」のための条件はピカイチ。しかし問題は、1億2千万人も避難民をどの国が受け入れてくれるのかということ。この点は、この映画でも十分な問題意識を持って描いているが、アメリカからは「これ以上の避難民受け入れ拒否」という悲劇的事態も。そんな事態になって、「アメリカは日本を見放したのか！」と嘆いてみても後の祭……。

そう考えると、日本は常日頃から海外からの避難民を受け入れておくことが大切。避難民の受け入れに難色を示し、散々やこしい条件をつけておきながら、いざ「日本脱出の際はよろしく」と言っても、通用しないのは当たり前。「観光立国宣言」をして、海外からの旅行客を1千万人に倍増させるという取り組みは評価できるが、避難民受け入れのための条件整備のためには、入管法（出入国管理及び難民認定法）の大幅な見直しが必要。

フランスやドイツなどヨーロッパ諸国では、アラブ人やイスラム人たちの移民受け入れをめぐるいつも大問題があるが、島国ニッポンでは幸か不幸か、今までそういう問題が深刻化することは少なかった。しかし、「日本沈没」を射程距離に考えた場合は別。

そう考えると、最も近くで、最も広大な面積を持った国は中国。いかにして中国と仲良くし、いざ「日本脱出の際にはよろしく」と言える関係にしていくのか……？ それは至難の技だが、それをやるのが政治家の仕事。ポスト小泉による総理大臣をはじめ、多くの政治家たちはこの映画に登場する山本総理や鷹森危機管理担当大臣の姿を参考にして研さんに励み、決して野崎官房長官になることのないよう心してほしいものだ。そして、「国会は国権の最高機関であって、国の唯一の立法機関である」（憲法41条）ということをよく自覚し、「入管法」の大胆な見直しを検討・着手してもらいたいものだ。

2006(平成18)年6月1日記